

Games of the XXXII Olympiad, Tokyo 2020 参加報告書

WR 審判員 (1265、愛知県ボート協会所属) 田畑喜彦

1. はじめに

東京、海の森水上競技場にて東京オリンピックボート競技が開催され、国際審判 (ITO) として参加しましたのでご報告させていただきます。

2. 大会概要

(1) 開催期日：2021年7月23日 (金) ~7月30日 (金)

(2) 会場：海の森水上競技場 (Sea Forest Waterway)

(3) コース

言わずと知れた海の森水上競技場であるが、発艇員の左手側から 0,1,2...レーンとなるのが通常のコースであり、海の森水上競技場はテレビ中継を行う場合は画面の上側から 0,1,2...と Rule Book の例外規定に該当する。通常のコースに慣れている海外 ITO は幾度となく 7レーン側からロールコールを始めていた。

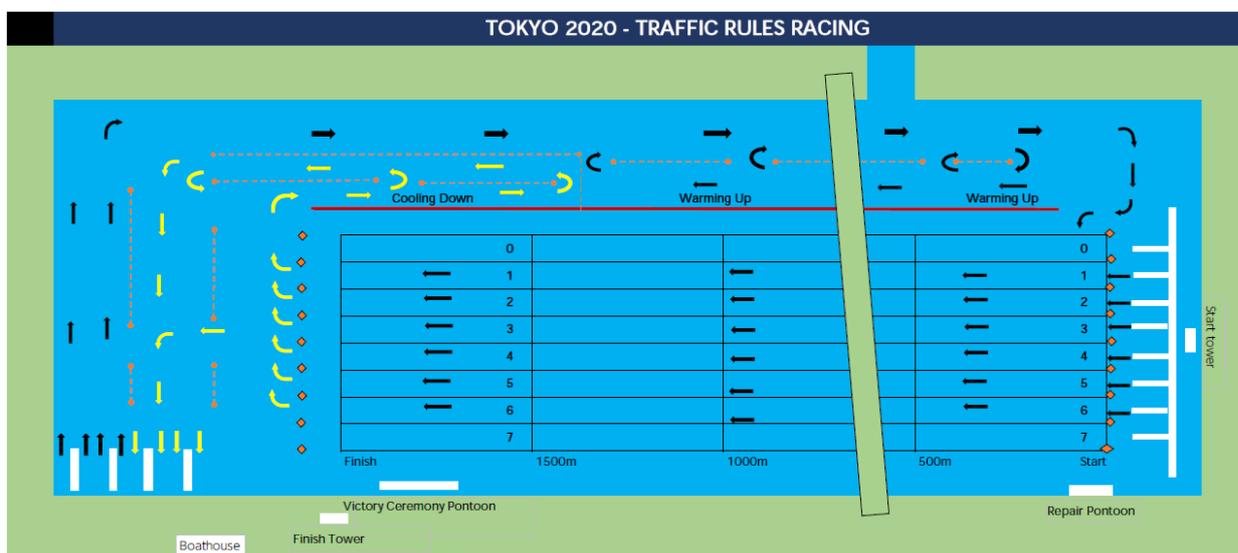


図-1 コースレイアウト (レース時)

(4) 開催種目

今大会から男女 7 種目、参加者数が 50:50 の男女 263 名同数の大会となった。これは World Rowing が強く意識したものであり、多くの他の競技に先駆けて実現した。(豪州、ニュージーランドは 2 名が 2 種目に参加、イタリアは医学的理由により補欠選手が交代出場のため、総参加数は 523 名)

種目：1x、2x、L2x、2-、4x、4-、8+

(5) 参加国

80 カ国・地域、今大会ではアフリカ等からオリンピック初参加国が多数あった。

(6) 参加審判 (ITO)

20 カ国・地域から 20 名の ITO と審判長として Patrick ROMBAUT(BEL)、World Rowing の Umpiring Commission から Fabio BOLCIC(ITA)、Vladimir MEGLIC(SLO)、Kristopher GRUDT(USA)、Innes HAMMAMI(TUN)の 4 名が参加した。

表-1 参加審判 (ITO)

Sergio RAMIREZ	ARG
Gregory SMITH	AUS
Magali Moreira de SOUZA	BRA
William DONEGAN	CAN
Mladen MARINOVIC	CRO
Michael Castro GOMEZ	CUB
Flemming GAUR	DEN
Angela Alonso FERNANDEZ	ESP
Marie-Laurence COPIE	FRA
Paddy IBBOTSON	GBR
Rolf WARNKE	GER
NG Wing Ning	HKG
Manola MARINAI	ITA
TABATA Yoshihiko	JPN
Tom Van der LELIJ	NED
Jercyl LERIN	PHI
Przemyslaw KNIGAWKA	POL
Ruzica KARJOVIC-IBROVIC	SRB
Patrick SEQUEIRA-BYRON	SUI
Aymen HAMMAMI	TUN

Tokyo 2020 OLYMPIC GAMES (ROWING)  
Sea Forest Waterway, 23-30 July 2021

2019年9月9日にFISA Executive DirectorのMatt SmithからTOKYO2020のITOに選出されたとのアナウンスがあつてから約1年10か月後、同じメンバー全員が海の森水上競技場に集うことができた。

国によっては大会参加前後の厳しい検疫条件など課せられていたが、全員が参加できたことは望外の喜びであった。



写真-1 参加審判 (ITO、UCメンバー：左) と World Rowing Family (右)

(7) 参加審判 (NTO)

海外6ヵ国7名の参加を得て、全32名のNTOが参加した。

NTO Leadは2016リオデジャネイロオリンピックにITOとして参加した隈元幸治氏(1371、神奈川県所属)が務め、統率された行動により競技をサポートした。

表-2 参加審判 (NTO)

National Technical Officials (NTOs) (JPN unless otherwise stated)			
AZUMA Otohiko		KURIYAMA Toshihisa	
Phillip Leslie FRASER	AUS	Ruth Chisnell MACNAMARA	USA
FUJII Hiromi		MATSUDA Masahiko	
FUJITA Takashi		Kirsten MEISNER	USA
FUKUYAMA Akiko		MIYAZAKI Yasuyuki	
HWANG Young Sang	KOR	NG See Hung	HKG
ICHIKAWA Manami		Ana NIKOLIC	SRB
INOUE Kazunori		OIZUMI Kazuhisa	
IWAO Hiroto		OKI Nobuhiro	
KATO Hironori		OKITA Shoen	
KAWASAKI Kenji		Lucia RAMIREZ	ARG
KIMURA Yukio		SHINOHARA Tomomi	
KITAMURA Michinori		SASUGA Junko	
KITAMURA Tomo		TANAKA Maki	
KUMAMOTO Koji		NARITA Yasuhisa	
KUNIMITSU Masahiro		TSUKADA Hideki	



写真-2 参加審判 (NTO)

3. 審判配置

今大会における審判 (ITO、NTO) 配置は表-3のとおり。ITOはローテーション、NTOは固定配置であった。

ITOとして参加したAngela Alonso FERNANDEZ(ESP)はWorld RowingのUmpiring Commissionメンバーでもあるがオリンピックは初参加のためローテーションには加わず、President of JuryのPatrick ROMBAUTの補佐として審判長席に配置され、Board of Juryの1員としてカウントされていた。

また、大会期間中ITO、NTOにCOVID-19感染者が発生し、当人とその濃厚接触者が行動制限を受けたため、各部署でフォローして大会を運営した。

表-3 審判配置

ポジション	ITO	NTO	備考
President of the Jury	1		
Umpire	6	8	NTO: 1Team Leader, 1Spare, 6Driver
Marshal		5	
Starter	1		
Assistant Starter	1	2	NTO: 1Team Leader, 1 Assistant
Judge at the Start	1	2	NTO: 1Aligner, 1Timing Assistant
Resp. Judge at the Finish	1	1	NTO: NTO Lead
Finish Judge	1	5	
Resp. Control Commission	1	2	NTO: 2Supervisor
Control Commission(out)	3	2	
Control Commission(in)	2	2	
Weighing Athlete	1	1	
Weighing Boats	1	2	
Board of the Jury	3		PoJ, Anjera, Other
Total	23	32	

#### 4. 審判方式

今大会で採用された特有の審判方式について以下に記す。

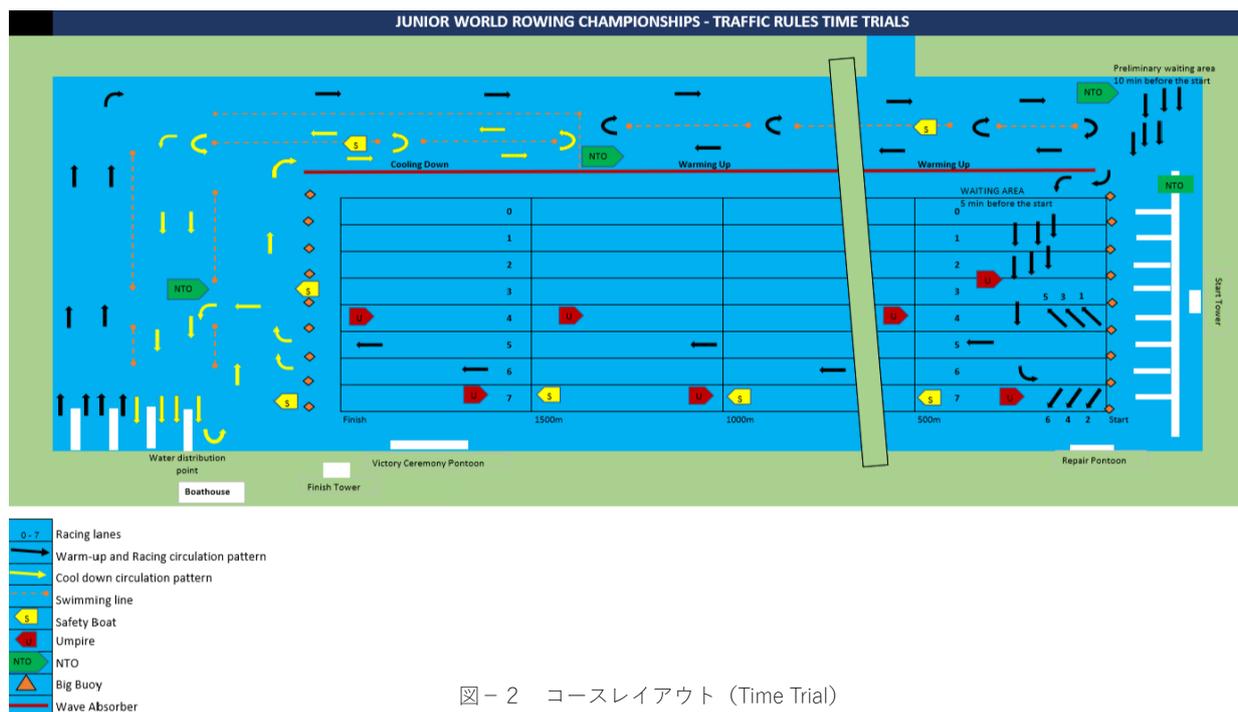


図-2 コースレイアウト (Time Trial)

##### (1) Time Trial (図-2 参照)

7月22日、補漕参加者向けに Time Trial が実施された。事前に関係者に配布された“Instructions to Race Officials”によると手順は以下のとおり。

- ① Time Trial は使用レーン 6 レーンの 1 レーンのみ。→実際には図-2 のように 5, 6 の 2 レーン使用して行われた。
- ② スタート方式はスタートフィンガーを使用する固定方式、使用レーン数は 1 レーンの場合は自動発艇方式は使用しないが、2 レーンのため自動発艇方式使用。
- ③ 各組のレース間隔は 10 分、各クルー毎のスタートギャップは 30 秒とする。各組 2 クルーが

シードされ、その他は抽選。

- ④ シードされた 1、2 その他の順に 3、4、5、6 番の順にスタート。
- ⑤ 各組毎に 1、3、5 番目のクルーは 4 レーンに、2、4、6 番目のクルーは 7 レーンにマーシャルの指示によって進入、待機する。
- ⑥ 待機クルーは 4 レーンと 7 レーンの後方に位置する **Assistant Starter** の指示により、5、6 レーンのスタートポイントに艇を付ける。
- ⑦ **Judge at the start** の指示による艇首揃えが行われ、その合図により、**Starter** が国名をコール後、信号によりスタート合図が行われる。
- ⑧ スタート直後、**Assistant Starter** の指示により、2、3、4 の順にスタートする。
- ⑨ **False Start** の場合、そのクルーは直ちに艇を止め、そのスタート順は 5 または 6 番目のクルーの後となる。
- ⑩ **Umpire** は 4 レーンまたは 7 レーンに、0m、500m、1,000m、1,500m、2,000m に配置し、追い越される艇があった場合、それらが追い越そうとする艇にまたは 7 レーンに入りコースを譲ったかどうかを確認する。

以上の方式による **Time Trial** であったが、各レース毎 10 分間隔であったこと、各クルーのレベルが高かったこともあり順調に行われた。マーシャルの待機水域への案内と **Assistant Starter** の呼び込みがこのような形式を円滑に進める“肝”であると感じた。

## (2) Zone 方式

**Final A** 以外、今大会では主審は **Zone** 方式が採用された。0m~100m は **Assistant Starter** が、それ以降は 500m 間隔で主審艇が配置される。事前の審判会議で審判長より詳細な配置図の説明があった。大会期間中、前半・後半でポジションが割り振られ毎日主審となったが、特にコールすることもなかった。熱暑の大会では風を受けることもない **Zone** 方式は主審艇乗務員には過酷なポジションと言える。

課題はシングルスカル参加クルー間には大きなレベル差があり、大きく遅れたクルーが手前側にいた場合レーン中央まで進み出て全体を注視することが困難であった。今後の改良点である。

また、初日の審判会議において自動発艇装置設置者である **OMEGA** チームの技術者によりその機構の説明があった。**False Start** または設備トラブルによる艇の損傷を防ぐため、ブーツに過度な荷重が作用すると、写真-4 の黄色部分赤丸内のヒンジが前方に倒れるという説明であった。またその場合は一旦全レーンのブーツを発艇ボタンを押してリリースさせ、再度浮上させれば戻るということであった。過去にロッテルダムの世界選手権で **False Start** があった際、艇がブーツを乗り越えたのを目撃したが、このような経験から設備が改良されたのかもしれない。

Tokyo 2020 OLYMPIC GAMES (ROWING)  
Sea Forest Waterway, 23-30 July 2021

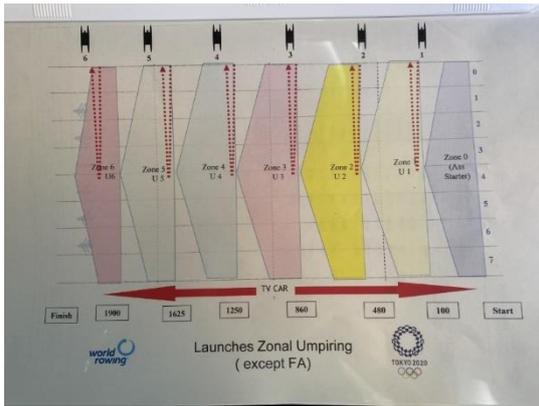


写真-3 Zonal Umpiring 配置図



写真-4 自動発艇装置



写真-5 発艇直前



写真-6 発艇直後

### (3) 最終レース

国際大会に参加する機会を得るようになってから、最終日の最終レース、**M8+**の主審に任命される審判は荣誉と受け止め、彼らが深い感慨に浸っていた姿を見ていた私は、自国開催のオリンピックボート競技において審判として選ばれたからには、最終日最終レースでの主審を務めたいというのが念願であった。

2012年ロンドンオリンピックに審判として参加した東乙彦さん（現北海道ボート協会会長）から



写真-7 最終日の"Team Umpires"

伺った話では、ロンドンオリンピック最終レースではイートン・ドーニーの観客席スタンドの地響きが水上で主審艇に上艇していた東さんにも伝わってきたと聞いており、最終レースの主審はまさにその渦中に身を投じる幸せを感じる最高の舞台であった。幸運にも私は最終日最終レース **M8+**の主審に任命された。ドライバーは気心の知れた大北勝圓氏（島根県ボート協会）であり、オリンピックの最終日最終レースを二人で楽しむこととした。

Tokyo 2020 OLYMPIC GAMES (ROWING)  
Sea Forest Waterway, 23-30 July 2021

TOKYO2020は無観客試合であり、メインスタンドには一部関係者が無音声で観覧する姿が見えるのみであった。コロナ禍で開催されたオリンピック、私が夢描いたオリンピック最終日最終レースとは全く異なったものであったが、そこで覇を争った選手たちにとっては晴れ舞台に間違いない。気を引き締めてレースに臨むこととした。

決勝前、私は予選で勝ち上がった **NED**、**GER** が優勢と見て、待機中に彼らの姿を間近でカメラに収めることができた。



写真-8 水上からの観覧席



写真-9 最終レース発艇前 (GER)



写真-10 最終レース発艇前 (NED)

レースはこの両クルーを中心に展開かと思われたが、敗復回りの **NZL** が確実に水をとらえ中盤でリードを奪い、そのまま歓喜のゴールになだれ込んだ。この間、わずか **05:24.64**。主審の私は旗に手をかけることもメガホンを持ち上げることもなくレースは終了した。ゴール後の **6** クルーを見まわし、レース成立の白旗を各クルーへ、**Finish** へ、そしてもう一度各クルーへ揚げた。**Finish** からの金・銀・銅メダル対象の **NZL**、**GER**、**GBR** の **3** クルーが無線で告げられ、彼らにビクトリーポンツーンへ向かうよう伝え、私の主審業務、そして **TOKYO2020** は終了した。

最終レースの表彰式終了後、主審、レスキューによる水上パレードが行われた。**WR** のレースでは主役はアスリートであり、審判は目立たないことを良しとする。審判が唯一主役？として檣舞台に建てるのがこのパレードである。表彰式が終了するのを待つ間、マーシャルも含めた **8** 艇がどのレーンに入るか、白旗・赤旗はどう持つのか、振るのか等を皆で楽しく打合せをしたことが忘れられない。

主審艇のドライバーはみな国内熟練のドライバーであり、きれいな雁行体形で実施された。



写真-11 M8+優勝の NZL クルー



写真-12 主審艇による水上パレード

## 5. コロナ対策

オリンピック開催にあたり、コロナ対策は関係するすべての人々が最も腐心したところかと思われる。事前の2回のワクチン接種、WebによるITO向けPLAYBOOK等のブリーフィング、会場入り前のPCR検査、開催期間中の日々PCR検査、等々。

海外から参加したITO、NTOは多くの国でワクチン接種が日本より先行しているようであったが、不幸にもワクチン接種1回の海外からのNTO参加者は大会開催前に発症、隔離され参加が叶わなかった。また大会中にも海外ITOと国内NTO各1名がPCR検査により陽性判定され、濃厚接触者とされたITO、NTO複数名は陰性判定結果が出るまでの間、別行動をとることとなった。



写真-13、14 感染対策のため個別に開催された審判会議（左：ITO、右：NTO）



写真-15 会場入り口でのセキュリティ&体温チェック



写真-16 宿泊会場の朝食風景

## 6. 所感

新型コロナウイルス禍で1年の延期後、無観客等簡素化による大会を実現した意義は大きく、国内外で多方面から評価をいただいている。特にオリ・パラを東京で開催するという国際公約を守る結果を後世に残せたことは、日本の国際評価にとって良いことであったと正直感ずる。ただ、準備の過程で生じた様々な問題は感染拡大と医療逼迫のさなかでの開催であったことが国民感情にしこりを残した面は否定できない。無理をして開催したイベント、との印象を払拭するためには、参加した我々が日本で開催した五輪の開催意義は何であったかを心底理解し、開催したレガシーをハード・ソフト両面でボート競技者すべてと国民のみなさんから評価いただけるよう努める必要があり、オリ・パラ両大会に参加させていただいた一人として今回の経験を様々な場で活かしていきたい所存です。

最後になりましたが、TOKYO2020 オリンピックボート競技の国際審判として参加させていただく機会をいただき、日本ボート協会はじめ関係者のみなさまへ深く御礼申し上げます。

7. TOKYO2020 点描



写真-17 仮設トイレ

私のレポートでは欠くことができないパート。  
発艇エリアにも同タイプが設置されており、  
脱 Farmer's Toilet が叶った大会でした。



写真-18 WBGT 計

グランドスタンド前に設置されていました。  
この大会の象徴の一つ。コロナとの戦いと、猛暑  
の戦い。



写真-19 C.C.メンバー

熱暑対策とコロナ対策の合わせ技。この状態では  
当初は誰が誰だか判別不能であったが、慣れてくると  
シルエットで判明できるようになった。

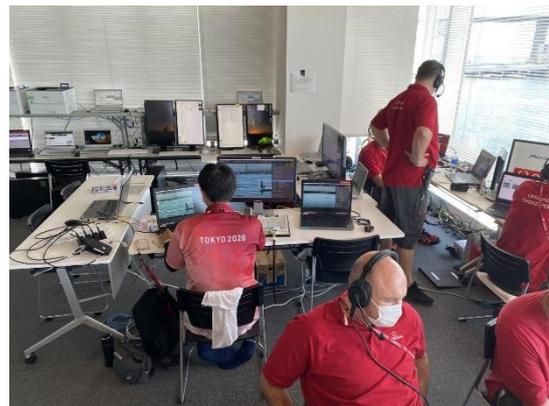


写真-20 Finish Tower 内

空調完備の審判部署一等地。モニターも完備され  
ておりレース状況もよくわかった。



写真-21 NZL ?

予選での M2-NZL クルー。C.C.でカントリーコード  
の貼られていないのを指摘すると、時間がないと  
言ってマジックペンで"NZL"と手描きで。バウサイ  
ド側でありテレビカメラにも映らないとして予選の  
み許可した。



写真-22 アドバタイジングルール違反?

AUS クルーのトップデッキ。この他にも各国の  
ナショナルカラーやナショナルフラッグをモチーフ  
にしたクルーが多数見られた。

Tokyo 2020 OLYMPIC GAMES (ROWING)  
Sea Forest Waterway, 23-30 July 2021



写真-23 UAC

ユニフォーム採寸・配布とアクレディテーションセンターの状況。

ジャケット・パンツのサイズは豊富であり、心配りが行き届いた日本メーカーならではの感じさせるものであった。



写真-24 優先道路

大会関係者が宿泊施設～大会会場への移動に際し、国際的にも有名な東京の道路渋滞を避けるため設定された五輪関係者の優先レーンを示すピンクのレーン。大会期間中、早出と昼過ぎのピーク時間帯外の移動のため、必要性を実感できなかったのが残念。



写真-25 Patricks

言わずと知れた今大会審判長、Patrick ROMBAUT(BEL) (右) と ITO の Patrick BYRON(SUI)。ダブル Patricks で写真を頂戴しました。我々日本の多くの国際審判は多くのことを Patrick ROMBAUT から学んでいます。彼に対しては感謝の言葉しかありません。



写真-26 Safety Boat

今大会、お疲れさまでした。みなさんのご協力あつての TOKYO2020 と思っています。



写真-27 Start Pontoon

Start Pontoon からの写真。TOKYO2020 象徴的な写真のひとつです。

Tokyo 2020 OLYMPIC GAMES (ROWING)  
Sea Forest Waterway, 23-30 July 2021



写真-28 早暁の Sea Forest Waterway

写真-29 日本の翼と Mt. Fuji

帰路での機内で撮影した写真です。大会終了後に海外 ITO・NTO 仲間を送ったところ大好評でした。

コロナ禍の辛苦を乗り越え日本まで駆け付けてくれた海外の Rowing Family、日本で開催するオリンピックに対し、熱い思いを抱えていてくれたことを大会後に実感できました。

このような仲間を得られたことは私のボート審判生活においてかけがえのないものを与えていただいたことに深く感謝申し上げます。

以上

